

遠藤彰子展

注目の6作品

生い茂る緑の葉や白い花を背景に、小人を思わせる4頭身くらいの人物たちが、チューバやホルン、ハープなどさまざまな楽器を奏でている。人間に混ざり、化粧をした2頭のゾウとシマウマが顔のぞかせている。サーカスのような怪しくにぎやかな情景である。

1969（昭和44）年、遠藤彰子さんは結婚を機に相模原市へ移住しアトリエを構えた。当時の相模原は田畑に囲まれた緑豊かな土地で、タヌキや野ウサギ、イノシシなどの動物がよく往来したという。昼は絵画教室を開き、夜はデッサンした動物を油彩で描くのが日課であり、「絵を描くこと自体が楽しい幸せな時期でした」と後に振り返っている。

風光明媚な環境で生活を送る中、人間と動物たちが共存し、不思議なカーニバルを繰り広げる「楽園」のシリーズが始まった。初期の代名詞ともいえるこの連作は、70年から6年にわたり、本作はその終盤に描かれた。草花や動物、小人のような人物たちは同シリーズおなじみのモチーフであるが、本作では楽器の演奏という新たな要素が加わることで、それまでの作品以上に生き生きとした雰囲気

「音楽」 1975年、縦130㌢、横162㌢

②

奏でる 動物との「楽園」



に満ちている。描くことに対する遠藤さんの純粹な喜びが、鑑賞者にも伝わってくるようである。

この「楽園」は、その後妊娠、出産なを反映することで形を変えていく。遠藤さんの絵画世界は幻想と現実が入り交じる「街」へ、やがて500号以上の「大作」へと展開していく。

とに伴う心身の変化や、当時の社会情勢

（黒沢匠・山形美術館主任学芸員）

「遠藤彰子展 巨大画で挑む生命の叙事詩」（主催・山形新聞、山形放送、山形美術館）は8月27日まで、山形市の山形美術館。中学生以下は土曜日と、日曜日午前中の入館無料。